

起居動作・和洋禮式より・

泉鏡花作

明治二十八年五月

君子は己を愼む。禮は人生に一分時も缺くべからざるものなれども、こゝに雜禮とて記したるは多々二人以上の同種屬の相會する場合に於て主に要するものゝ如し。これを古人が六藝の中に數へて、人の必ずしも學ばざるべからざるものとなせるより、學ぶといへば何となく其邊がものありげにて、頗るむづかしき様に聞ゆれども、別に面倒なることのあるにあらず。唯「あたりまへ」に、くはしく謂へば「いかにも然こそあるべきやう」に動かぬ所を行ふにあり。單に禮をなすの容儀にも眞行草あるありて、眞中の眞、行の行、草のまた草など、煩雜なるに似たれども其實仔細のなきことなり。こゝに（小よせ）の法）といへば、立たむと思ふに髻を上げ、兩足を爪立て、踵の上に髻を据え、左右の手を膝にのせて其より膝を少しあげてと、記したるを讀む時は、人間のこの身體の線入形であるかの如く、甚だ混雜なるやうなるが、試に思へ、世に最も粗忽者が、躓きてころびたる、其順序をば解剖的に、まづ足の指を土に着けて、歩行く拍子に五本の中の、其一本が小石に觸り、ハツと思ふと膝がツクリ、おやといふ間に横になりて、左か右の脇腹が地の上につきたりと書きて見れば、（小よせ）の式より寧ろ一段困難ならずや。しかもころびたる身に取っては、どつこいといふ瞬間なり。火事だ！ ソレッと身を起すにも、順序は自然と出來つゝありて風船玉の飛ぶ如くにふはりと身體の浮くにもあらず、まづびつくりして驚きてうむと腹に力をこめ、さて足が立ち、髻が起きて、その後名のある人間が駈出すも同一理なれば、いかに煩らはしき禮式も、字の上にこそむづかしけれ、行ふ者には易々たるのみ。凡そ文字にあらはすには、最も平易に仔細なき常に無心にてすること、が、最も亂雜になるものなれば、百科全書の一ページを一つことにて填めたるものは、讀む人これを行ふ時一番やすしと思はれよ。禮儀といふはわれ／＼が、言語と行爲のあるに因りて起る處の法式なり。ものも謂はず、動きもせず、羅漢の如きありさまにて、深山の奥に唯一人、默然として坐し居る分には、たとひ故らに無禮を振舞ひ、敢て毒言を吐かむと、務

めたりとも得べけむや。禮は社會に處するの道なり。お稻荷がどろ／＼にて枕上に立ち給ひ、善哉善哉なにがしとのたまひてこそ畏けれ。いかに神々しきお姿なりとも、「こう起きねえな用事がある」と聲かけられては尋くなし。婀娜窈窕たる美人にせよ、「おほあつたかい」と焼芋を頬張られては眞平なり。されば禮儀は一個人の品位を保つに缺くべからず。人の前にて丁寧にお辭儀といへば、何となく商人根性の様に聞えて、醜きやうに見ゆれども、それ何とて然るべき。行儀正しき人に逢へばおのづと襟の正さるゝ。吾まい、つ横に寝ころべば、下碑も下男も晝寢をして、齒ぎしりの音高かりなむ。謂はずやみづから卑くして後人之をいやしむと、之に反して長屋の小僧の、常には、「おつかあ」といふ處を、「かゝさん」と謂へばとて、「おかあさま」と呼べばとて、聞苦しきこと更になし。胡坐を掻きてする職業を、正しくすわりてなせばとて、何見苦しきことあるべき。行暮れたりし武者修行の一夜の宿の宿の主に向ひて、「言語つきなら起居の一御ハRTVごハRTV様子由緒あるお方と思はるゝ。」とむかしよりよくいふことなり。拙者楠の末孫なりと、自ら名の者にして五合あふりてくだをまかば、誰やはこれを眞とする。さる處に盜賊あり、トある一軒家に忍び入りて、梁上に君子となりすまし、内の様子をうかゞふ處に、ゐり傍に老嫗居りて、鍋にてものを煮つゝありし其寐るを待ちたりしに老嫗はやがて蓋を除きて、なかななる粥を柄杓にすくひ、其のまゝ撮みて熟否のほどを、まづ誰にても試みなもを、しづかに、指もておし試み、再び鍋中に投ぜしを、彼の盜賊はうかゞひ見て、其ゆかしさに感歎なし、ものは得盗らで去りしとぞ。これもまた禮の徳なり。敢て禮を行ふを盜に對する道とにはあらず、おもしろからぬはなしなりとも、味見れば幾分の、甘酸なきを保たんや。

固より信州の山間より罷出でたる者なりとも、人の枕を踏むことや、人の女房をつく／＼と、見ること位の不作法は、心得ざるはなかるべきも、随分ものを知りたるが、人の物かく硯を見懸けて、筆の飛入などしさうなことなり。楊枝を借りておのが齒を、磨きて返すはあらざらむが、一寸煙管とこれも同口に含むものなるを、平氣に借りるはいと多し。これ知らざるの過失なり。此類いかに多からむ、心すべきことならずや。